

うことのできる基本的研究対象の確立にある。おそらくこれが、本書の著者が従来の研究者のように無造作に〈内容〉検討に立ち入ろうとせず、先ず〈物質〉としての文献の研究、書誌学についたことの理由である。また〈内容〉を扱う際にも、文献に見える言葉をひとつの〈物質〉を扱うように、文字どおり定量定性的に解析することからはじめている。その典型的な作業として、たとえば本書では割愛されているが、一九八一年に刊行された『東洋医学善本叢書』所収の「『脈経』総説」の後半をあげることができる。筆者には、こうした方法の徹底が〈内容〉検討に至る不可避の過程と考えられたに相違ない。私たちもまた、著者の一連の作業を、中国医学研究を〈文学〉から〈科学〉に転じさせようとする試みとして高く評価してきた。

私たちは、本書の刊行によつて中国古典医学考究のための最も信頼すべき研究書を得ることとなった。著者若年時における漢文学習の素養から来たとみられる文体は硬質かつ端正である。今後、本書が研究者必備の一本となるであろうことを疑わない。

(篠原 孝市)

〔増書房〕〒113 東京都文京区本郷六丁目八―一六、☎〇三―一三八―二―五八二一、一九九六年二月発行、A5判・函入り、七二六頁、本体価格二二〇〇円〕

タイモン・スクリーチ著、高山宏訳

『江戸の身体を開く』

本書はタイトルからして一見、江戸時代の解剖学史のように思えるが、そうした従来の著述とはおよそ趣が異なる。一言で本書の性格を表現するのはとてもむづかしいが、いくつかのキーワードがあるように思えた。

ヨーロッパと日本、美術史と絵解き、図像学(イコノグラフィ)と文献学、刀と鋏、解剖医と画家と彫り師、身体地理学、解体図と風景画などなど。

こうした様々な視点から、目もくらむほどの多量の図版と文献を博引・比較し、江戸の身体観と解体図の関連をまさに解剖し、説明してゆく。医史学関連書としてはまったく斬新な書といつていい。以下の目次を見るだけでも視点のユニークさが分かるだろう。

序章は「アクセスの図像学」。第一章「刀」は、「人斬りは、もはや時代遅れ」「人々は刀に異国を見た」「鋏、花、そして人体」「舶来の鋏」「ブルータルな魅力」「箱と折りたたみナイフと」からなる。第二章「身体を切る」は、「外科と外科道具」「オランダ医学」「切る医者」の各篇。第三章「さらされる身体」は、「人間は一個のプロセス」「西洋の絵のインパクト」「彼らは本当に切ったのだろうか」「解剖と権力」の各篇。第四章「つくられていく身体」は、「骨のある話」「内外真偽、それが条件次第也」「食物合戦のメタフォリス」「オランダ料

理、切られる食材」「内に身体ができる」の各篇。第五章「身体と国家」は、「手」「身体地理学」「解剖と旅行」「循環」「身体は世界に開かれる」の各篇。そしてエピソードと結びからなる。

さて単に評者の無知か読み違いかもしれないが、次のような指摘にはとても興味を覚えた。たとえば十八世紀オランダの絵画では、様々な物の内部を切り開いて見せることが多いこと。キリスト教では身体が神の化身なので、身体を知ることとは神を知ることにつながる(らしい)こと。ヨーロッパのみならず十八世紀後半の蘭画派の一部の画家たちも、解剖学を絵の基本と考えたらしいこと。日本の解剖図は誰々の解屍であつて死臭がただよい、多くが卷子本のため進行する紙上解剖となつているが、ヨーロッパの解剖図は様々な解剖知見の合成で、個別解剖の事象を描いていないので死臭がなく、冊子本のため必要部分を開いてみればよいこと。江戸期に大流行した中国医書『十四経發揮』の洒落本『十四傾城腹之内』や、春画シリーズの『枕文庫』などに『解体新書』の影響があること。『蔵志』が徳川家光の没後百年、『蘭学事始』が家康の没後二百年であること等々。

読者によつて印象は違うだろうが、こうした興味深い指摘が本書には多い。ただし疑問に感じたのが二点ほどあつた。六四頁と八四頁で、著者は当時の漢方の外科を西洋の外科と同じものと理解しているらしく、これで議論している。しかし漢方という外科は今の皮膚科に近い分野なので、的はずれ

な分析となつていようだ。七六頁では、一八〇〇年頃に西苦楽が描いた西洋理髪店の風景に「蘭医頭部外科手術図」の名が付けられていることから、当時の日本人が絵から受けた感覚を論じている。しかし、これはもともと床屋外科医の図らしく、だとすれば、そう名づけられても不思議はないのではなからうか。

さて著者は結びでこういう。

本書は解剖学と解剖図譜の歴史を単純に追うのではなく、まさしくこうして解剖学が自らの彼方へ逸出していった知られざる歴史を扱おうとした。……こうして、解剖のレトリックが医学からはみでて、もつと広い地平に影響を及ぼしていった様子を描くのが本書の眼目だった、と。

この目的と試みは成功していると感じた。著者によれば、視覚資料から得られる証拠を支えに意識の歴史を研究する方法を、最近ではニュー・アート・ヒストリーと呼ぶらしい。すると本書は、ニュー・アート・ヒストリーで日本の医学史を研究した書なのである。そして江戸期の解剖にかかわる医事等を文化としてとらえ、多様な視点から比較し、解剖してみた。その切り口は新鮮で、今後の医学史研究に大いに参考となるだろう。

最後になつたが、本書の訳文は大変すばらしく、おおよそ翻訳であることを感じさせない。それで苦なく最後まで読了することができた。

(真柳 誠)

〔作品社・〒102―0072東京都千代田区飯田橋二一七―四〇三、
〇三一三六二―一九七五三、一九九七年三月発行、A5判、
三四六頁、本体三七〇〇円〕

藤野 豊編

歴史のなかの「癩者」

ここに紹介する本については、九七年十一月の編集会議の席上、小生に案内するよう手渡された。発刊から一ヶ年半をへているが、書籍案内として書くこととした。

この本は五章から構成されており、四人の執筆者が夫々の章を分担し、藤野 豊氏が編者となっている。

主な内容は次の如くである。

第一章 古代・中世の「癩者」と宗教

―差別と救済―

小林 茂文

第二章 近世癩病観の形成と展開

鈴木 則子

第三章 隔絶のなかのハンセン病患者

藤野 豊

第四章 「戦後民主主義」のなかのハンセン病患者

藤野 豊

第五章 法的差別の撤廃に向けて

後藤 悦子

ここに記した執筆者の方々は人文系の研究者であり、ヒュ

ーマニズムの基盤の上にたつてハンセン病患者への差別を撤廃するための闘争の歴史を、多くの資料、文献を用いて書き上げられた。このことにまず敬意を表したい。

実を申すと、小生は最近、横浜の増田癩治療所の研究をはじめたところである。

明治四十年に横浜市医師会が発足するのであるが、その経過の中で二人の増田医師が活躍する。しかし二人共二年位で医師会史の中から消えてしまう。この二人の姓名と住所などは判明したが、どちらが癩治療所にかかわった医師か不明であった。

ところが、この本を読むうちに、第三章の第二項「帝国日本」とハンセン病患者、の中に「隔離の実態」（第一六〇頁）の冒頭で、増田勇医師（皮膚科開業医）の「ハンセン病問題は基本的には「人道問題」であるとすると『癩病と社会問題』という著作」が紹介されていることを発見した。隔離に反対した増田勇医師は、医師会から排除されたと考えられる。（増田勇医師と思われる人物が結節癩患者を治療している写真を、宮古南静園の菊地一郎園長が論文で紹介している）。

このように史実が掘りおこされると、問題はぐつとせまってくる。

臨床経験五十年近い小生にも、かつて三人に診断を下した経験がある。一人は金持のインド人。ニューヨークの病院に行けば一般病棟に入ると云うと、非常に感謝して渡米した。もう一人は医局出入りの若い商人。プロミンを内服すれば必